様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　21　年　5　月　27 日現在

研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2006～2008
課題番号：１８３３０１６６
研究課題名（和文）　学習共同体の生成と個の学び―移動と固有名性に焦点をあてて―

研究課題名（英文）　Constructing learning communities and individual learning: Focusing on transition and singularity

研究代表者
松下　佳代（MATSUSHITA KAYO）
京都大学・高等教育研究開発推進センター・教授
研究者番号：30222300

研究成果の概要：
本研究では、多様で異質なフィールドのデータ（理学療法学生の臨床実習、高校生のナラティヴなど）を協働的に分析・解釈していくことで、学習共同体と個の学びの関係を、「移動」と「固有名性」に焦点をあてて明らかにすることをめざした。その結果、臨床実習という学校から仕事への移動過程での学びの特徴を表わす「二重の応答性」、コミュニティ間移動におけるインタラクションの失敗が成員性をこえた固有名の自己形成をもたらす可能性を指摘した「ギャップ」といった、新しい概念装置が創出された。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年度	1,800,000	540,000	2,340,000
２００７年度	1,400,000	420,000	1,820,000
２００８年度	1,800,000	540,000	2,340,000
年度			
年度			
総　計	5,000,000	1,500,000	6,500,000

研究分野：　社会科学
科研費の分科・細目：　教育学・教育学
キーワード：学び、コミュニティ、移動、固有名性、ナラティヴ、二重の応答性、ギャップ、フィンランド

１．研究開始当初の背景

本研究でいう「学習共同体」とは、「学びの共同体（コミュニティ）」「ディスコース・コミュニティ」「ナラティヴ・コミュニティ」など系をなす諸概念の総称であり、「人びとが共同体の中核的な実践として、学習の共同的な営みに意識的に参加するようなタイプの実践共同体」のことである。

学習共同体論は、とりわけ 1990 年代以降、学習論・発達研究、授業論、カリキュラム論、学校論などに大きな影響を与えてきた。また、学校改革、学級・授業づくりなどの実践においても、学習共同体を理念に掲げたさまざま

な試みがなされている。しかし、研究開始当初、学校（大学を含む）という学習共同体についての研究は、どちらかといえば実践先行であり、必ずしも理論的に十分深められているとはいえない状況にあった。

当時、学習共同体論において議論されていたのは、以下のような論点である。

(ｱ)学習共同体の概念／(ｲ)学習共同体における学びの質／(ｳ)学習共同体の生成・構築と転換のプロセス／(ｴ)学習共同体と個人の関係／(ｵ)複数の実践共同体間の移動／(ｶ)実践（活動）と語り（物語）の関係

本科研の研究グループ（松下、高木、庄井）は、日本教育方法学会第 40 回大会（2004 年 9 月、和光大学）において課題研究「『学習共同体』論の現在」）を組織して、上のような論点整理を行い、大きな反響を得た。その後、杉原を加えて継続的に共同研究を進めていったが、そのなかで、とりわけ重要な論点として浮かび上がってきたのが、「移動」と「固有名性」という概念であった。これは上の論点のなかでは、特に(ｴ)と(ｵ)に関連している。これらの概念は、学校という学習共同体にとって不可欠の概念であるにもかかわらず、そのことはまだ十分認識されていなかった。このような問題意識から、松下・高木・庄井は、The 1st International Society for Cultural and Activity Research Congress (ISCAR 2005) (Sep.2005, Seville) において、“Emergence of ‘learning community’ and ‘learners as singularity’ through boundary crossing”と題する発表を行った。その研究をさらに進展させるために組織されたのが、本科研である。その後、平山も研究分担者に加わり、５名で研究を進めてきた。

本研究のメンバーは、教育方法学、発達心理学、臨床教育学、大学教育学、理学療法学といった学問分野にまたがり、また、それぞれの分野で本研究の開始以前にすでにかなりのフィールドワークと理論的研究を蓄積してきていた。本研究では、メンバーがそれぞれのフィールドでの事例研究を進めるとともに、それらの事例研究のデータを持ち寄り、データの解釈・分析と理論形成に協働で取り組むことになった。

２．研究の目的

本研究の目的は、学習共同体と個の学びの関係を、「移動」と「固有名性」に焦点をあてて明らかにすることにあった。この２つの概念に着目したのは以下のような理由による。

①移動という視点

「移動（あるいは移行)」とは、共同体の境界を超え出ることであり、それには、「通時的移動」と「共時的（並行的）移動」がある。通時的移動とは、時間軸にそった移動であり、その代表的なものは＜学校から仕事への移行 (school to work)＞である。一方、共時的移動とは、あるスパンのなかで繰り返される移動であり、例えば、「W スクール現象」（学校と塾・予備校などの間の移動)、「トライアングル型」の成長環境（家庭・地域と学校と消費文化世界の間の移動）などがある。現在、このような移動の困難さは、子ども・青年に「移行危機」と呼ばれる事態を引き起こしている。それは、例えば、学校不適応、学力危機、学卒無業者の増加、離転職の繰り返しなどである。

こうした移行危機は、学校の役割と学校で学ぶ意味の問い直しを促している。学校は、Lave & Wenger の実践的共同体のようにそこでの十全的成員になることを目的とするのではなく、＜ここ＞とは別の共同体で生きていく力と関係性を個々の子どもに育てることを目的とする共同体である。したがって、子ども・青年の移動（移行）を学校はどのように支援しうるかということが重要な視点になる。

②固有名性という視点

移動によって個人が複数の共同体に参加することになれば、学びを成員性の獲得によってのみ説明することは難しくなる。この問題に対して、例えば Wenger(1998)は「多重成員性」という概念で解決を図ろうとしているが、それは個人誌的な位相を捨象している点でなお不十分である。本研究では、複数の共同体を固有な軌跡を描きながら移動している個人の学び・発達を把握しうる概念として、「固有名性」という概念を導入する。固有名性は、成員性への還元不可能性、他者との代替不可能性を意味している。これによって、学習共同体における個の学びを、単に成員性だけでなく、固有名性においても捉えられるようになる。

一方、本研究には、以下のような下位の問題群が含まれていた。

〈1〉 学習共同体の実践と個々の子どもの学びとの関係はどう捉えられるか。

学習共同体と個人との関係は相互構成的関係にあるといわれるが、その内実をさらに明らかにする必要がある。特に、協働の活動のパフォーマンスと個々の学びを区別することが求められる。

〈2〉 学習共同体はどのように生成されるのか。

学習共同体の生成のプロセスとメカニズムを、＜共同体－対－個＞に着目して描出する。

〈3〉 複数の実践共同体間での移動は、学習共同体の実践や学びの質にどのような影響を

及ぼしているか。
複数の実践共同体への多重帰属やさまざまな移行危機（＜学校から仕事への移行＞の危機など）が広がるなかで、学校という学習共同体やそこでの学びに求められる要件を明らかにする。

〈4〉学習共同体における個の学びを、固有名的に捉えるにはどのような概念装置が必要か。
複数の共同体間を固有の軌跡を描きながら移動していく主体の学びを把握し援助するために、成員性と固有名性の両面から主体を捉える枠組みを構築する。

このなかでも、特に〈3〉と〈4〉が中心的な問題となった。

３．研究の方法

学習共同体の生成と個の学びとの関係を移動と固有名性という視点から検討するためには、長期的なフィールドワークが必要になる。本研究のメンバーはそれぞれ個別に、異なるフィールドにおいて事例研究を行ってきた。本研究では、協働でのフィールドワークを新たに加えるとともに、そうした多様で異質なフィールドのデータを協働的に分析・解釈していくことで、フィールドをこえた共通性とそれぞれのフィールドの特殊性を同時に記述・説明しうるような概念・理論の形成をめざした。

(1) 個別のフィールドワーク
研究目的を共有した上で、個々のメンバー行ってきたそれぞれのフィールド（小学校の教室でのインタラクション、高校生のナラティヴ、理学療法学生におけるパフォーマンス評価と臨床実習、大学教育でのコミュニティ形成など）での事例研究を継続して行った。

(2) 協働でのフィールドワーク
2007 年2月14日～21日にフィンランドを訪問し、オウル大学（カヤーニ校）の SILMU（乳幼児支援施設)、カヤーニ大学コンソーシアム、オウル大学(オウル校)を訪問し、映像データや関係資料を収集するとともに、コンソーシアム議長、オウル大学長、Teaching Development Unit のメンバー、教育科学・教員養成学科の教員・大学院生にインタビューを行った。また、オウル大学の Pentti Hakkarainen 教授らのグループと研究交流を行った。現在、これらのデータについて、学習共同体の生成とそこでの学び（ナラティヴ・コミュニティの生成とナラティヴ・ラーニング、教員と学生による teaching development の共同体の生成など)、子ども・学生の学びに根ざしたカリキュラム・活動の構成、移動と固有名性を視野に入れたコンピテンスの形成などの視点から分析した。

(3) 協働での分析・解釈
個別および協働のフィールドワークで得られたデータを持ち寄って、それらの分析・解釈を協働で行った（個別のフィールドワークについては、担当者が自己の分析結果を示し、それを集団で討議した)。本研究のデータはほとんどが質的データであり、分析・解釈の信憑性(credibility)を高めるためにも、この手続きは不可欠であった。

(4) 協働での理論形成
ISCAR 2005 での発表内容（“Emergence of ‘learning community’ and ‘learners as singularity’ through boundary crossing”)を土台にしつつ、事例研究の協働的な解釈・分析を通じて協働での理論形成を行った。

４．研究成果
＊（ ）内の業績は、「５．主な発表論文等」の番号

(1) 個別のフィールドワークとその分析
①石川県の小学校で収集した授業実践データ（教室会話）を、学習共同体の生成、そこにおける集団と個人のエンパワメント、それらのプロセスにおける教師の役割という点から明らかにした（C2)。また、学習共同体を生成する上で「声」が重要であることを、PISA 型リテラシーとの対比において論じた（C4)。
②2005 年のフィンランド訪問で収集したデータを、「コミュニティ研究を基盤にしたナラティヴ・アプローチ」という観点から分析した。そのなかで、子どもの自己物語が他者や社会との絆をもちつつ固有名性を得るプロセス、子どもの物語を新しい物語へ組み替えるナラティヴな支援とそれを実現するためのコミュニティ支援のあり方が明らかになった（A3, C1)。
③理学療法学生におけるパフォーマンス評価、およびそれをめぐって生成した学習共同体（同学年のグループ、上級生や教員との関係性）での学びについて、ビデオ記録やインタビューなどのデータを通じて分析した。その結果、パフォーマンス評価場面のリフレクションが深い学びを促すことが明らかになった（B1)。

(2) 協働でのフィールドワークとその分析
①オウル大学の SILMU での「ナラティヴ・ラーニング」の観察と分析を通じて、子どもたちが、演劇＝遊び的空間で、自分たちのい

きいきとした感情に触れつつ、それぞれの固有名をもった「自己物語（self-narrative)」を構築していること、また、「自己物語」とその環境世界との多元的結合を可能にするような学習環境が準備されていることを明らかにした（B2)。

②フィンランド調査で収集した文献資料とインタビューデータにもとづき、現在、大学において世界的にみられる能力観の転換（コンピテンス、エンプロイヤビリティなどの概念）とそれにもとづくカリキュラム・デザインについて、ヨーロッパで進められている Tuning Project を中心に、批判的検討を行った（A5)。また、フィンランドの FD にあたる teaching development についても日本の FD コミュニティ形成との関連で検討した（A4)。

(3) 協働での分析・解釈と理論形成

The 2nd International Society for Cultural and Activity Research Congress（ISCAR 2008）において、“Community, transition and self-construction（コミュニティ・移動・自己形成）”というテーマのシンポジウムを企画し、全員が発表を行った。このシンポジウムの意図は、多様な実践共同体の間の移動を通して生起する学びと自己形成の問題を、単に社会性（成員性）だけでなく固有名性にも焦点をあてながら明らかにすることにあった。

松下・平山は、学校から仕事への移動過程にある理学療法教育での臨床実習をフィールドとした研究を通じて、臨床実習における学びの特徴として「二重の応答性（dual responsibility)」という概念を提案した（B3)。これは、障害をもった新たな身体によって生活世界との「応答性」を再獲得しようとする患者に対し、「応答性」をもった働きかけをすることを意味している。シミュレーションがどれほど精緻化されても決して学校では実現できない学びであり、固有名性をもった患者との関係性のなかで初めて可能になる学びである。

庄井は、不登校経験をもち特別支援学校に通う高校生が自己物語を再構成していくプロセスを、生徒の描画と教師との対話をデータに描き出した（B4)。

高木・庄井は以上の２つの事例研究を意味づけるフレームワークを提示した。このフレームワークは、コミュニティ間を移動する際に生じるインタラクションの失敗を「ギャップ(gap)」と名づけ、それがコミュニティの要求する役割をこえた固有名の自己形成をもたらす可能性を論じた点に特徴がある（B5)。

最後に、指定討論者であるフィンランド・オウル大学の Pentti Hakkarainen 教授から、今後深めていくべき課題（developmental transfer と移動の関係、二重の応答性が生じる条件など）について示唆を得た。

以上の成果は、“Community, transition and self-construction”と題する冊子（全 53 頁）にまとめて、2009 年 3 月に公刊した（C5)。

(4) 理論研究

以上の研究に必要な理論研究を個々に行い、その成果を発表した。

①個の学びを把握する際のキー概念となるリテラシー、学力、コンピテンシー、エンプロイヤビリティといった能力概念の検討（A1, C3)

②能力概念に焦点をあてたフィンランドと日本の比較検討（A2)

③本研究のフレームワークの基盤にある学びの共同性についての考察（A6)

④大学教育における「主体的な学び」論（アクティヴ・ラーニングなど）についての学習論検討（A7, B6)

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計７件）

A1. 松下佳代（2006)「大学生と学力・リテラシー」『大学と教育』43 号（査読無)、24-38 頁

A2. 松下佳代（2006)「リテラシーと学力―フィンランドと日本―」『教育』56 巻 10 号(査読無)、4-10 頁

A3. 庄井良信（2006)「ナラティヴ・ラーニングの開拓」『教育』56 巻 10 号（査読無)、52-58 頁

A4. 松下佳代（2007)「課題研究『FD のダイナミックス』の方法と展望」『大学教育学会誌』29 巻 1 号（査読無)、4-10 頁

A5. 松下佳代（2007)「コンピテンス概念の大学カリキュラムへのインパクトとその問題点―Tuning Project の批判的検討―」『京都大学高等教育研究』13 号(査読無)、101-119 頁(http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/53927)

A6. 庄井良信（2007)「学びの共同性と生活指導」『生活指導』13 巻（査読無)、60-73 頁

A7. 松下佳代（2009)「主体的な学びの原点―学習論の視座から―」『大学教育学会誌』31 巻 1 号（査読無)、14-18 頁

〔学会発表〕（計６件）

B1. 平山朋子・松下佳代「パフォーマンス評価によるリフレクションと学び」日本教育方法学会、2007 年 9 月 29 日、京都大学

B2. 庄井良信「「物語の詩学」を求めて：ヴィゴツキーの情動理論の教育学的展開という視座から」The 1st ISCAR-Japan、2007 年 9 月 6 日、武蔵工業大学環境情報学部
B3. Matsushita, Kayo & Hirayama, Tomoko: Between school and work: Emergence of double responsibility in the student's clinical practice of physical therapy. The 2nd International Society for Cultural and Activity Research Congress (ISCAR 2008). Sep.9, 2008, UCSD (University of California, San Diego)
B4. Shoy, Yoshinobu: The Poetics of self-narrative: Episode analysis of the 'experiencing'(переживание) of a singularity through inter-community transitions. ISCAR 2008. Sep. 9, 2008, UCSD
B5. Takagi, Kotaro & Sugihara, Masaaki: Theoretical framework of two field studies. ISCAR 2008. Sep.9, 2008, UCSD
B6. 松下佳代「主体的な学びの原点」大学教育学会 2008 年度課題研究集会、2008 年 12 月 6 日、岡山大学

〔図書〕(計 5 件)
C1. 鬼沢真之・佐藤隆編著 (2006)『学力を変える総合学習』明石書店、全 333 頁 (庄井良信「『自己物語』を世界へつむぐ」105-125 頁)
C2. グループ・ディダクティカ編 (2007)『学びのための教師論』勁草書房、全 288 頁 (松下佳代「非 IRE 型の教室会話における教師の役割―エンパワメントとしての授業―」193-220 頁)
C3. 日本教育方法学会編 (2007)『教育方法 36 リテラシーと授業改善』図書文化、全 153 頁 (松下佳代「数学リテラシーと授業改善―PISA リテラシーの変容とその再文脈化―」52-65 頁)
C4. 寺岸和光著、松下良平・松下佳代解説 (2008)『「かかわりの力」で学級が変わる―対話する学びが育てるもの―』三学出版、全 189 頁 (松下佳代「声とリテラシー―PISA 型学力をこえて―」177-184 頁)
C5. Matsushita, Kayo (Ed.) (2009) *Community, transition and self-construction*. 平成 18 年度～平成 20 年度科学研究費補助金 (基盤研究(B) 課題番号 18330166)「学習共同体の生成と個の学び―移動と固有名性に焦点をあてて―」研究成果報告書(1)(http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/77710)

６．研究組織

(1) 研究代表者
松下　佳代 (MATSUSHITA KAYO)
京都大学・高等教育研究開発推進センター・教授
研究者番号：30222300

(2) 研究分担者
高木　光太郎 (TAKAGI KOTARO)
東京学芸大学・国際教育センター・教授
研究者番号：30272488

庄井　良信 (SHOY YOSHINOBU)
北海道教育大学・教育学研究科・教授
研究者番号：00206260

杉原　真晃 (SHOY YOSHINOBU)
山形大学・高等教育研究企画センター・講師

研究者番号：30379028
平山　朋子 (HIRAYAMA TOMOKO)
藍野大学・医療保健学部・准教授
研究者番号：80388701

(3)連携研究者
なし